

[学術論文]

自我体験の経験時における深刻さと 体験後の意味づけに寄与する要因の検討

—初発時期と体験期間を切り口にして—

The Contribution of the Age of the Initial Experience and the Duration for “Ego-Experience”
to the Extent of the Seriousness and the Meaningfulness about Them

天 谷 祐 子

Yuko AMAYA

Studies in Humanities and Cultures

No. 14

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 14号
2011年2月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
FEBRUARY 2011

[学術論文]

自我体験の経験時における深刻さと 体験後の意味づけに寄与する要因の検討

—初発時期と体験期間を切り口にして—

**The contribution of the age of the initial experience and the duration for
“ego-experience” to the extent of the seriousness and the meaningfulness
about them**

天谷 祐子
Yuko Amaya

要旨 本研究は、「私はなぜ私なのか」という問い—自我体験—を経た人に関して、初めてそれを経験した時期、体験期間の長さにより、自我体験を経験する際の深刻さや経験後の意味づけの程度が異なるという仮説を検証することを目的とした。自我体験を経たと判定された大学生400名を対象に、自我体験の初発時期と体験期間の関連、自我体験の初発時期と体験期間の違いによる自我体験尺度得点・体験を経た際の深刻さ得点・体験後の意味づけ得点の違いを調べた。その結果、初発時期が小学校高学年よりも中学以降という遅い人ほど体験期間が長めにシフトすることが示唆された。また体験期間については、1回から数回という短い期間の群が、それより長い群よりも自我体験尺度得点・自我体験を経た際の深刻さの程度・自我体験後の意味づけの程度が低いことが示された。初発時期に関しては意味のある結果は得られなかった。以上により、自我体験を経た際の深刻さ・自我体験後の意味づけの程度に影響を及ぼしているのは、初発時期よりも体験期間であることが明らかにされた。

キーワード：自我体験、初発時期、体験期間

<問題と目的>

本研究は、「私はなぜ私なのか」という問い—自我体験—を経た人に関して、初めてそれを経験した時期（以後「初発時期」と表記）、体験期間の長さ（以後「体験期間」と表記）という要因により、自我体験を経験する際の深刻さや経験後の意味づけの程度が異なるという仮説を検証するものである。

自我体験は全ての人が経験する現象ではなく、おおそ半数程度の人が経験する（天谷，2002，2004）。また自我体験の初発時期に関しては、小学校後半を中心として、その前後に広がっている（天谷，2004）。そして、天谷（2004）による自我体験の基礎的な研究によると、自我体験を経る際には、体験を経る際の深刻さ・体験の意味づけの程度について個人差が、意味づけについては発達差が見られることが明らかになっている。このように、自我体験を経験するか否か、経験したとしてもその初発時期や体験期間、深刻さ、体験後の意味づけ一つ一つの要因に関しては個人差が見られ、自我体験の体験される様相や位置づけを一樣に記述することは難しい。

このような自我体験に関する個人差に関して、天谷（2008，2009a，2009b，2009c，2009d，2010a，2010b）による一連の自我体験とその関連要因の研究では、自我体験を経る際の深刻さの程度や、自我体験を経た後の意味づけの程度を独立変数として、関連要因とのかかわりを検討している。「自我体験を経験し、かつ深刻に経験するのは（また積極的に意味づけしているのは）どういう人か、どういった考え方を有しているか、どういった認知的枠組みを有しているか」という視点からの研究である。例えば天谷（2009b）では自我体験の深刻さの程度とパーソナリティ特性の関連、自我体験後の意味づけの程度と孤独観（人間関係に対する価値観）の関連を明らかにしている。これらの研究は、多様な自我体験が経験された「その後」の青年に及ぼす影響や自我体験の発達の位置づけを考察するには、非常に重要な視点であると言える。

しかし、同じ自我体験を経験する者であっても、経験した自我体験の深刻さの程度や自我体験を経た後の意味づけの程度に個人差が見られるのがなぜなのか、といった視点からの問いに対して、これらの研究は答えを出せない。ここで掲げた視点は、自我体験の生起の個人差に影響を及ぼす要因を明らかにしようとするものである。本研究ではこのような観点から、自我体験の深刻さの程度や自我体験を経た後の意味づけを従属変数としての位置づけで検討する。これにより、自我体験生起に関わる個人差を説明していくにあたり、経験される様相のより基礎に立ち返った部分について明らかにすることができる。

なお本研究では、自我体験を経験する個人差（体験時の深刻さの程度や体験後の自我体験に対する意味づけの程度）に影響を及ぼす第1の要因として自我体験の初発時期、第2の要因として体験期間の長さに注目する。前述したように、自我体験の初発時期に関しては小学校後半が中心的ではあるが、その前後に広がっている。特に小学校前半に自我体験が初発した場合と、小学校後半に自我体験が初発した場合、中学校に初発した場合では、自我体験における問いに対する取り組みとして、当人の認知発達の状態や試行錯誤の熟達の程度に明らかな違いが見られ、その結果当人に及ぼす影響が異なることは想像に難くない。例えば田畑（1985）では、小学校2年時に自我体験に関わる問題が未解決のまま思春期に持ち越され、心理的危機に陥った事例を報告し、早すぎる時期に自我体験を経ることの問題点を指摘している。この田畑（1985）の事例ほど病的でないにしろ、認知発達や言語発達、論理的操作等の側面で心理的な準備状態が整っていない

時期に自我体験を経る場合と、準備状態が整った時期に経る場合では、当人に与えるインパクトは異なるであろう。病理的でない自我体験を経験する場合に、自我体験生起後の個人差を説明する要因として、(ポジティブ/ネガティブどちらの影響を当人に及ぼすのかはわからないが) 時期の要因は非常に大きいと考えられる。

また第2の要因として自我体験の体験期間の長さに関しては、精神的健康に関わる研究が参考になると思われる。伊藤・上里(2001)はネガティブな事柄について、考える時間が長くなるほどうつ状態をもたらすことを指摘している。また浅本・小川・鈴木(2006)は死に関する思考について、ネガティブな反すうが死について情報を得たり、自分なりに考えて解釈しようとしたりする熟考対処を促進し、その熟考対処が死への不安を高めることを明らかにしている。本研究における自我体験に関してもこのようなモデルを援用し、長く自我体験への問いについて考える、つまり自我体験の体験期間が長くなると、自我体験の体験時の深刻さの程度が高くなると仮定する。

さらに方法論的な観点からは、今までの天谷による一連の研究(例えば天谷, 2009b, 2009c)は、自我体験の未経験者と経験者の間の違いや、自我体験の経験者をさらに「深刻な体験者」と「深刻でない体験者」に分けて、未経験者も合わせて検討する方法を採用している。従って、多くの「体験者」のみを分析対象として研究を進めるスタンスを取っていない。これは結果的に、体験者のみを詳細に検討するには人数が少なすぎるという問題を生じさせている。

この点について天谷(2010)では、いくつかの調査により集められた多くの「体験者」のみを分析対象として、自我体験の意味づけの内容を詳細に検討している。本研究においても、このような天谷(2010)による研究のように、いくつかの調査により集められた「体験者」のみを分析対象として、少ない人数においては「個人差が見られる」としか表現できなかった部分について、ある一定の傾向を見出すことを目指す。

以上から本研究では、自我体験の初発時期と体験期間を切り口として、これらにおける個人差が、自我体験を経る際の深刻さや、自我体験を経た後の意味づけの程度に影響を及ぼしていることを明らかにすることが目的である。この検討を通して、今後自我体験の体験パターンによる分類を行うには、どのような分類方法が適切であるかを明確化する。

<方法>

1. 分析対象者：自我体験を経たと判定された大学生400名(男性161名、女性225名、不明14名)であった(平均年齢19.62歳、 $SD=1.38$)。この対象者は、天谷・Amaya(2008, 2009a, 2009c, 2009d, 2010a, 2010b)による自我体験に関する6回の質問紙調査全対象者合計1235名(男性533名、女性651名、不明51名、平均年齢19.46歳、 $SD=1.38$)のうち、体験に関する自由記述内容から「自我体験体験群(以後「体験群」と表記)」と判定された者のみである。質問紙調査全対

象者の内訳はAmaya (2008) は218名 (体験群74名)、Amaya (2009a) は209名 (体験群58名)、天谷 (2009c) は157名 (体験群45名)、Amaya (2009d) は209名 (体験群56名)、Amaya (2010a) は234名 (体験群76名)、天谷 (2010b) は208名 (体験群78名) であった。それぞれの調査の回の「体験群」の人数を合計しても本研究の分析対象者の人数とならないのは、それぞれの調査の回の「体験群」の人数は、自我体験尺度と関連尺度双方の評定に欠損値があった人を省いた人数として表記されているためである。本研究の体験群の分析対象者は、自我体験尺度のみについて欠損値があった人を省いている。

2. 質問紙: a) 自我体験尺度: 天谷 (2005) による自我体験尺度15項目 (5件法) であった。項目内容は「1. 自分はどこから来たのだろうか」、「2. 自分はどこへ行くのだろうか」、「3. 自分は何だろうか」、「4. 自分は誰だろうか」、「5. 一体何をもって「自分」としているのか」、「6. 自分の正体って何だろうか」、「7. 自分の存在そのものが不思議だ」、「8. 自分は本当に自分か」、「9. 自分はなぜ自分なのだろうか」、「10. だれでもなく、どうして自分なのだろうか」、「11. 自分が自分であることが不思議だ」、「12. なぜ私はこの体をえらんだのか」、「13. 私が私としてでなく、他のだれかとして生まれたということもありえたのに、どうして私となっているのだろうか」、「14. いろんな人がいるのに、なぜたまたま私なのだろうか」、「15. 自分はなぜ、他の国や他の時代ではなく、日本の、この時代に生まれたのか」であった。これらの質問項目に対して「思ったことがある」、「近いことを思ったことがある」、「何となくあったような気がする」、「思ったことがない」、「わからない」の5件法のうち1つを選ぶよう求め、1項目以上「思ったことがある」、「近いことを思ったことがある」、「何となくあったような気がする」のいずれかを選択した被調査者に対してその具体的内容を自由記述にて求めた。

b) 自我体験を経た際の深刻さに関する質問項目: 水間 (2003) による自己嫌悪感へのとらわれの項目 (4項目) を本研究に沿った形で部分的に改変して使用した。天谷 (2009c) のデータ分のみ、異なる尺度を使用して「深刻さ」を測定したので、「深刻さ」に関わる分析の対象人数は、本研究の分析対象者の人数と異なる。

c) 自我体験を経た後の意味づけに関する質問項目: 天谷 (2005) において独自に作成された自我体験を経た後の意味づけに関する質問項目 (3項目、5件法) を使用した。具体的には「A (自由記述内容) を考えたことは、自分にとってよいことだったと思う」、「Aについて考えたことは、その後の自分に何らかの形で影響していると思う」、「Aを考えたことは、自分にとって何か意味があったと思う」という項目内容であった。自我体験を経た後の意味づけに関する質問項目の内容を変えて質問した調査の回が存在するため、「意味づけ」に関わる分析の対象人数は、本研究における分析対象者の人数と異なる。

d) 自我体験の初発時期、体験期間に関する質問項目: 自我体験の初発時期について、「幼稚園

以下、「小学校低学年」、「小学校中学年」、「小学校高学年」、「中学1年」、「中学2年」、「中学3年」、「わからない」、「その他」の選択肢の中から一つを選ぶよう求めた。自我体験の体験期間に関する質問項目は、「1回～数回のみ」、「数日間」、「1週間前後」、「1週間～1ヶ月」、「1ヶ月～3ヶ月」、「3ヶ月～半年」、「半年～1年」、「1年以上」、「その他」の選択肢の中から一つを選ぶよう求めた。なお調査によっては体験期間に関する質問を設定しなかった回が存在するため、「体験期間」に関わる分析の対象人数は、本研究における分析対象者の人数と異なる。

3. 「体験群」の選別までの手続き：各被調査者の自我体験に関する質問項目の評定と自由記述内容の質的分析から、全ての被調査者の記述が自我体験とみなせるかどうかを判定した。ここまでの手続きは天谷（2004）・天谷（2005）における分析にて明らかとなっている。なお、「体験群」の自我体験尺度の15項目を合計した得点（自我体験尺度得点）の平均値は54.74点（ $SD=12.39$ ）であった。「体験群」以外の群（「未体験群（自我体験を経っていないと判定された群）」・「誤解群（自由記述内容が自我体験とは全く異なる内容を記述したと判定された群）」・「あいまい群（自由記述内容が自我体験と判定するには不十分と判定された群）」の自我体験尺度得点と、「体験群」の自我体験尺度得点に違いが見られるかどうかについて、1要因分散分析を行い検討した。その結果、主効果が見られた（ $F(3, 1147)=169.26, p<.001$ ）。Tukey法による多重比較を行った結果、全てのカテゴリ間で有意差が見られた（「未体験群」<「誤解群」<「あいまい群」<「体験群」, $p<.05$ ）。これにより、自由記述内容により分類された「体験群」が、自我体験尺度得点において他の3群に比べて有意に高いことが示され、分類結果が妥当であることが明らかにされた。

<結果と考察>

1. 自我体験の初発時期と体験期間の関連

自我体験の初発時期について、それぞれのカテゴリに分類された人数は、「幼稚園以下」が10名、「小学校低学年」が54名、「小学校中学年」が46名、「小学校高学年」が64名、「中学1年」が40名、「中学2年」が36名、「中学3年」が19名、「わからない」が93名、「その他」が37名、不明が1名であった。この9つのカテゴリに基づいて、他のカテゴリとクロス集計表を作成する際、1つのセル内の人数が5名以下となるセルが存在するおそれのあるカテゴリが存在した。したがって、複数のカテゴリを1つにまとめても内容的に違和感がないように考慮し、カテゴリの数を4とした。具体的には「幼稚園以下」と「その他」を削除し、「小学校低学年・中学年」・「小学校高学年」・「中学」・「わからない」の4カテゴリとした。

自我体験の体験期間について、それぞれのカテゴリに分類された人数は、「1回～数回のみ」が112名、「数日間」が51名、「1週間前後」が16名、「1週間～1ヶ月」が19名、「1ヶ月～3ヶ

月」が10名、「3ヶ月～半年」が6名、「半年～1年」が14名、「1年以上」が44名、「その他」が49名、不明が79名であった。この9カテゴリに基づいて、他のカテゴリとクロス集計表を作成すると、1つのセル内の人数が5名以下となるセルが存在するおそれのカテゴリが存在した。よって、「初発時期」に関するカテゴリの圧縮と同様、「体験期間」についても、複数のカテゴリを1つにまとめても解釈可能性が維持されるように考慮したうえで、カテゴリの数を4とした。具体的には「1回から数回」、「数日から1週間」、「1週間から1年」、「1年以上」の4カテゴリとし、「その他」を削除した。

自我体験の「初発時期」4カテゴリと「体験期間」4カテゴリのクロス集計表を作成し、それぞれのセルにおける人数に偏りがあるかどうかについて、 χ^2 検定を行い検討した。その結果 (Table 1)、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(9)=23.59, p<.01$)。そこで残差分析を行った結果、小学校高学年に初発の群は「数回から1週間」が有意に多く、中学に初発の群は「1回から数回」が有意に少なく、「1週間から1年」が有意に多い結果となった。

Table 1 自我体験初発時期と体験期間に関する人数分布

初発時期	体験期間								合計
	1回から数回		数回から1週間		1週間から1年		1年以上		
	人数	残差	人数	残差	人数	残差	人数	残差	
小学校低・中学年	32	(1.1)	12	(-1.9)	11	(-0.8)	17	(1.5)	72
小学校高学年	13	(-0.6)	15	(2.4) *	4	(-1.3)	5	(-0.7)	37
中学	17	(-2.5) *	14	(-0.7)	20	(3.1) **	14	(0.9)	65
わからない	33	(1.8)	19	(0.7)	9	(-1.2)	7	(-1.9)	68
合計	95		60		44		43		242

注*: $p<.05$, **: $p<.01$

2. 自我体験の初発時期と体験期間の違いによる自我体験尺度得点の違い

分析対象者全体における自我体験尺度得点の平均値は54.00 ($SD=12.60$) であった。自我体験尺度得点について、自我体験の初発時期(4)×体験期間(4)の2要因分散分析を行い検討した。その結果 (Table 2)、体験期間に関する主効果が見られた ($F(3,221)=13.01, p<.001$)。交互作用は見られなかった。体験期間に関してTukey法による多重比較を行ったところ、「1回から数回」が「数回から1週間」・「1週間から1年」・「1年以上」よりも有意に低い結果となった ($p<.05$, Figure 1)。

Table 2 初発時期と体験期間の違いによる自我体験尺度得点の分散分析結果

	SS	df	MS	F
初発時期	544.09	3	181.36	1.34
体験期間	5277.37	3	1759.12	13.01 ***
初発時期×体験期間	1588.84	9	176.54	1.31
誤差	29884.25	221	135.22	
全体	728665.00	237		

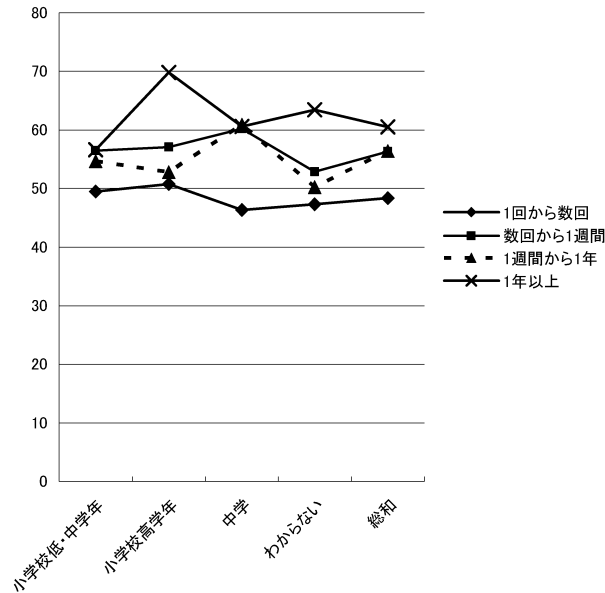


Figure 1 自我体験尺度得点に関する初発時期×体験期間の分散分析結果

3. 自我体験の初発時期と体験期間の違いによる体験を経た際の深刻さ得点の違い

自我体験を経た際の「体験群」全体の「深刻さ」得点の平均値は11.09点 ($SD=4.21$) であった。自我体験を経た際の深刻さ得点について、自我体験の初発時期(4)×体験期間(4)の2要因分散分析を行い検討した。その結果 (Table 3)、体験期間に関する主効果が見られた ($F(3, 184) = 30.16, p < .001$)。交互作用は見られなかった。体験期間に関してTukey法による多重比較を行ったところ、「1回から数回」が「数回から1週間」・「1週間から1年」・「1年以上」よりも有意に低く、「数回から1週間」が「1週間から1年」よりも有意に低い結果となった ($p < .05$, Figure 2)。

Table 3 初発時期と体験期間の違いによる自我体験の深刻さ得点の分散分析結果

	SS	df	MS	F
初発時期	76.69	3	25.56	2.40
体験期間	963.10	3	321.03	30.16 ***
初発時期×体験期間	59.12	9	6.57	0.62
誤差	1958.53	184	10.64	
全体	27411.00	200		

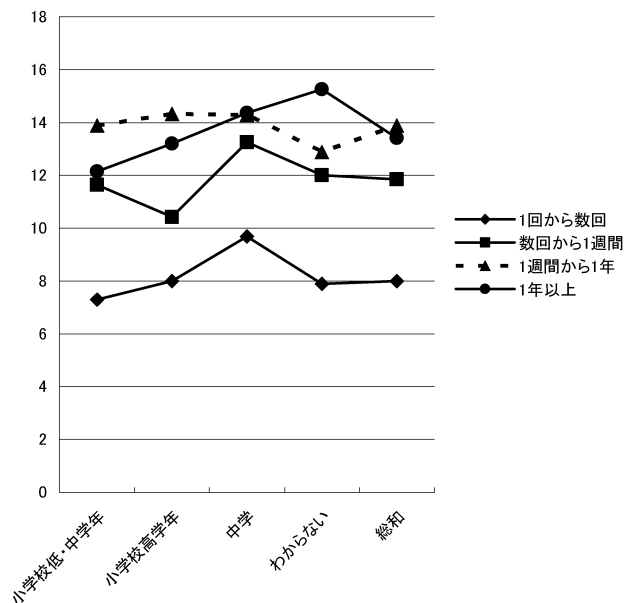


Figure 2 深刻さ得点に関する初発時期×体験期間の分散分析結果

4. 自我体験の初発時期と体験期間の違いによる体験後の意味づけ得点の違い

自我体験を経た後の意味づけ得点に関して、「体験群」全体の平均値は10.56点 ($SD=3.01$)であった。体験後の意味づけ得点について、自我体験の初発時期(4)×体験期間(4)の2要因分散分析を行い検討した。その結果 (Table 4)、体験期間についての主効果が見られた ($F(3, 165) = 6.24, p < .001$)。交互作用は見られなかった。体験期間についてTukey法による多重比較を行ったところ、「1回から数回」の群が他の3群よりも有意に得点が低い結果となった ($p < .05$, Figure 3)。

Table 4 初発時期と体験期間の違いによる体験の意味づけ得点の分散分析結果

	SS	df	MS	F
初発時期	30.36	3	10.12	1.22
体験期間	155.00	3	51.67	6.24 ***
初発時期×体験期間	24.35	9	2.71	0.33
誤差	1366.32	165	8.28	
全体	21482.00	181		

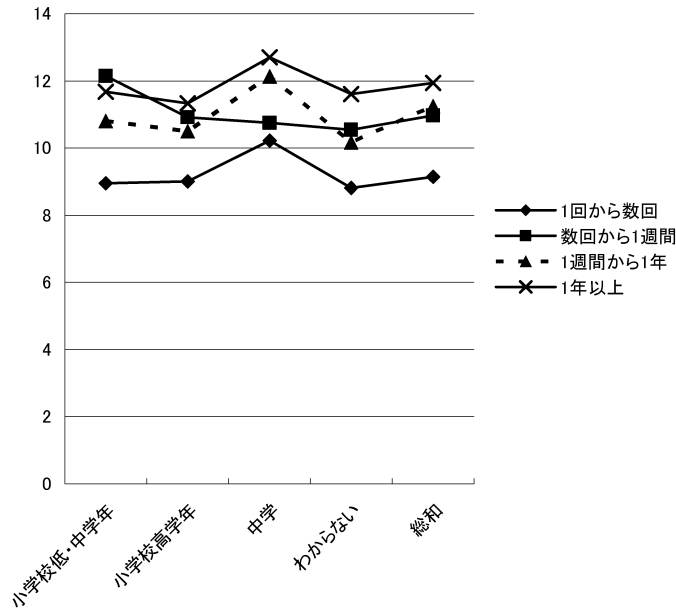


Figure 3 意味づけ得点に関する初発時期×体験期間の分散分析結果

<総合考察>

1. 自我体験の初発時期と体験期間の関連

本研究の結果、中学時に自我体験が初発する人は、体験期間が短い人は少なく、1週間から1年間というある程度まとまった期間の間考え続ける傾向があることが示された。また小学校高学年に初発時期のある人は、数日から1週間という短めの体験期間が、他の時期に初発の群に比べて多いことが示された。したがって、初発時期が遅い人ほど体験期間が長めにシフトする可能性が示唆される。

本研究の結果は、小学校高学年以降の時期において、自我体験の初発が遅いほど、知的能力が発達し、また思考するための試行錯誤のバリエーションを多く持っていることで、体験期間が長くなるものと考えられる。天谷（2004）による中学生から大学生を対象とした調査においては、自我体験の初発時期は小学校高学年を中心としてその前後に広がっていることが示されている。初発時期の中心的な時期である小学校高学年においては、自我体験の体験期間は中程度であるが、初発がそれ以降になると、深刻さがやや強まる可能性が考えられる。また、より長い期間考えることで、精神的健康の程度も損なわれやすい可能性も出てくる。天谷（2009）では自我体験を経験する際に深刻さの程度が強い場合は、未体験者に比べて神経症傾向が高い一方、体験後の意味づけも高いことが示唆されている。自我体験の初発時期が遅いことは、深刻さの程度も高まり、それに伴い、自我体験の当人にとっての意味づけも高くなり、当人にとってよりインパクトの強い経験となりうることも示唆される。

また、小学校低学年・中学年に初発する場合は、まだピアジェの言う形式的操作、つまり抽象的な思考を十分に行うことができないため、体験期間がある特定のカテゴリに集中しなかったことも考えられる。しかし、渡辺・小松（1999）における大学生を対象とした自我体験初発時期の集計結果からは、小学校低学年にピークがあることが示されている。報告を自我体験とみなす定義や基準に関して、研究者間の相違は見られるだろうが、今後は小学校低学年・中学年を対象とした研究により、実際にこの年齢層においても自我体験を経ることが可能であるのか、可能であるとしたらどのような体験の内容が報告されるのか、早い時期の自我体験が当人に及ぼす影響について明らかにすることが望まれる。

2. 自我体験の初発時期と体験期間の違いによる自我体験尺度得点

本研究の結果、体験期間が短いこと（1回から数回であること）が、それより長いことよりも自我体験尺度得点が低いことが示されるにとどまった。自我体験尺度得点に強い影響力を与えているのが初発時期なのか、体験期間なのかという問いについて、積極的な回答を提示することができない結果となった。自我体験の初発時期がどのような時期であれ、体験期間が短い場合は、自我体験の中にいくつか存在する問いのバリエーションのうち、ごく一部についてしか考えることがないものと思われる。それにより、結果的に自我体験尺度得点が他の群よりも低くなるものと考えられる。

また、西村（1978）では、事例により急激かつ啓示的体験としての自我体験について考察している。西村の示す自我体験は、少数回のインパクトのある自我体験であると考えられるが、西村はこの種の自我体験を経る人は少数派であると指摘している。本研究により、西村（1978）の示すタイプの自我体験を経る人は多数派ではないことが実証的に示されたと言える。

3. 自我体験の初発時期と体験期間の違いによる体験を経た際の深刻さ・意味づけ

本研究の結果、自我体験を経た際の深刻さ・意味づけともに、体験期間における違いが見られ、体験期間が「1回から数回」の群が、それ以外の群よりも有意に低かった。この結果は、自我体験尺度得点に関する考察と同様、初発時期がいつであれ、体験期間が短い場合は、自我体験に際する深刻さの程度も低く、その後の意味づけについてもあまり積極的でないという、やや「消極的な」結果が得られるのみにとどまったことを示している。今後は、自我体験の体験パターンによる群分けを想定する際には、初発時期による分類ではなく、体験期間が「1回から数回」というカテゴリと「数回以上」といったカテゴリに分けて検討・分析する方が、自我体験を経験する際の個人差をうまく反映するものと考えられる。

4. 今後の課題

本研究の結果、自我体験の体験期間が極端に短い場合とそうでない場合で、自我体験を経験する際の深刻さや経験後の意味づけにおいて異なることが示された。しかし、今後の課題も残された。今回の分析対象者はすべて大学生であり、自我体験の初発時期については、大学生の回想法に基づく記憶に依存しているという問題が挙げられる。本研究により得られた知見は、自我体験の初発時期や体験期間を切り口として自我体験を経験する際の個人差をどのように分類するのが妥当かという問いを、大学生を対象とした調査により、方向性を確認するための位置づけとみなすことができる。今後は、小学生や中学生を対象として、本研究により得られた知見を実際に確認していくことが望まれる。

<文献>

- 天谷祐子 2002 「私」への「なぜ」という問いについて：面接法による自我体験の報告から 発達心理学研究, 13, 221-231.
- 天谷祐子 2004 質問紙調査による「私」への「なぜ」という問い—自我体験—の検討 発達心理学研究, 15, 356-365.
- 天谷祐子 2005 自己意識と自我体験—「私」への「なぜ」という問い—の関連 パーソナリティ研究, 13, 197-207.
- Amaya, Y. 2008 The contribution of “Ego-experience” toward self-acceptance, academic motivation, and attitude toward death. *Society for Research on Adolescence 2008 biennial meeting (poster)*.
- Amaya, Y. 2009a The Contribution of an “Ego-experience” To Attitudes Towards Ambiguity and the Negative Rumination Trait. *Society for Research in Child Development 2009 biennial meeting (poster)*.
- 天谷祐子 2009b 自我体験とパーソナリティ特性・孤独感との関連 パーソナリティ研究, 18, 46-56.
- 天谷祐子 2009c 自我体験と批判的思考の関連 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, 138.
- Amaya, Y. 2009d The Contribution of an “Ego-experience”: To Openness-closedness of personality and the cognitive behavioral self monitoring. *XIV European Conference on Developmental Psychology (poster)*.
- Amaya, Y. 2010a Contribution of ego-experience to self-consciousness. *American Psychological Association, 118th Annual Convention (poster)*.
- 天谷祐子 2010b 「私はなぜ私なのか」という問いとレジリエンス・共感性の関連 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1081.
- 浅本有美・小川俊樹・鈴木伸一 2006 青年期におけるネガティブな反すが死の不安とその対処に与える影響 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 5, 6-15.
- 伊藤拓・上里一郎 2001 ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討 カウンセリング研究, 34, 31-42.
- 水間玲子 2003 自己嫌悪感と自己形成の関係について—自己嫌悪場面で喚起される自己変容の志向に注目して— 教育心理学研究, 51, 43-53.
- 西村洲衛男 1978 思春期の心理—自我体験の考察—(pp. 255-285) 中井久夫・山中康裕編 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社.
- 田畑洋子 1985 “お前は誰だ!” の答を求めて：ある登校拒否女子高生の自我体験 心理臨床学研究, 2, 8-19.
- 渡辺恒夫・小松栄一 1999 自我体験：自己意識発達研究の新たな地平 発達心理学研究, 10, 11-22.